

新しい学校のあり方を求めて

鈴木 陽子

一、きのくに子どもの村、

ある朝の職員室の様子

◇六月二十二日（水）九時

大人の朝の連絡が終わると、職員室に子どもたちが入ってきました。大人に話しにきたり遊びにきたり、この部屋は子どもがいつもいっぱいです。「おはよう、ようこちゃん。きょうは昔の遊びある？」と一年生のSくんがやってき

ました。「きょうはないなあ。火曜日にまたしようね」

二、先生のいない学校、きのくに子どもの村

この学校は、一九九二年に和歌山県橋本市の山の中に誕生した私立の小さな寄宿学校です。小中高生あわせても子どもは二百人ほどです。

ここでは先生と呼ばれる人はいません。けいたくん、かわちん、まるちゃん、そして学園長もほ

りさんです。

変わったところはもつとあります。もう少し、この日の様子を見てみましょう。

三、小学校の授業

◇六月二十二日（水）九時十分

今日は一日中プロジェクトと呼ばれる授業です。「ファーム」では、連絡の後、バスで三十分ほどの橋本市内のたんぼに出かけていきました。田植えをします。

クラスは四つあり、「工務店」「ファーム」「ひつじハウス」「おもしろ料理店」という名前です。

子どもたちは年度の初めに各クラスを活動内容や友人関係、担当の大人などを考えて選びます。最も時間数の多いプロジェクトという授業の内容は、建物を建てたり、米を作ったり、羊を育てた

りします。活動内容はそれぞれに違いますが、衣食住から題材をとっています。

四、変わった原則

その1：自分で決める

子どもたちはクラスを選ぶだけではありません。たとえば、金曜日のプロジェクトの時間は翌週の活動内容を自分たちで決めます。また週に四回、クラスを離れて選ぶ「チョイス」があります。ダンス、合奏、美術、書道などで、先ほどの「昔の遊び」もそのひとつです。つまり、いろいろなことを自分で決めていく学校なのです。

その2：体験を通して学ぶ

◇六月二十二日（水）

ファームの田植えで、子どもたちは自作の道具を転がしながら苗を植えていきました。まっ

すぐに進んでいるつもりでも徐々に曲がってしまします。ズレが大きくなり、苗の密度の濃い部分と、ぽっかり穴の開いたように何も無い部分ができました。「あれ？ ハゲができてる」「まっすぐ進むって難しい〜」ハゲの部分にも苗を植え、もう大丈夫、と思つて見たすと、植えはじめあたりの苗がプカプカ浮いてきています。さしがあまいのと、みんなが何度も通つたためでしょう。浮いた苗を拾い、もう一度植えなおしました。

きのくには、椅子に座つての授業は学習の一部にすぎません。それよりも、このような体験を通して学ぶ授業を大幅に取り入れています。大人はこうしなさいとは言わずに、子どもたちの次のような過程を見守ります。

(あれ？ へんだなあ)(どうしたらいいかなあ)

(こうしたらどうだろう)(うまくいかないなあ)(あつ、こうすればいいんだ)

もちろん子どもにあわせて手を貸すこともあります。

そして「見て！ できた！」「たのしかったー」試行錯誤してできた喜びを味わえるように配慮しています。

その3：個性を重視する

ファームは一年生から六年生までの十九人です。きのくには異年齢の中で男の子も女の子も混じつて、いろいろな体験ができるようにしています。「チヨイス」でも同様で、活動するグループの人数は、七人のときもあれば三十二人です



ときもあり、状況に応じて柔軟なグループ編成をしています。

こうした活動を通じて、わたしたちはどの子にも、感情、知性、人間関係のいずれの面でも自由な子どもに育つてほしいと願っています。

四、子どものようすから

見学にみえる方は、よく、「子どもの村の子は、とにかく元気で、目がきらきらしている」といつてくださいます。

今年、きのくにの一年生になった私の娘はこんな感想をもらっています。「うちはラッキーやなあ。きのくにに入れて」「そりゃ楽しかったよ。

田植えが一番楽しかった」

先日、卒業生が中学校の教育実習に来て、こんな感想を書いていました。「授業は、子どもから

の鋭い質問に困惑。それにしても楽しかった！きのくにには、実習生も自由にしてくれる学校です」

子どもたちの顔を思い浮かべると、この学校をつくるのに大きな影響を与えたA・S・ニールの言葉を思い出さずにいられません。

「まず子どもを幸せにしよう。そうすればすべてはその後に続くのだ」

(きのくに子どもの村学園)

参考文献

堀真一郎『きのくに子どもの村』プロンズ新社 一九

九五

堀真一郎『自由学校の設計』黎明書房 一九九七